



羅針盤



土田 哲也
Tetsuya Tsuchida

埼玉医科大学皮膚科 教授

リベドって何だろう？

リベドって何だろう。多くの方が疑問に思いつつも、正解はいまだない。しかし、実際には、医師国家試験に複数出題されるくらい、医師として当然理解しておくべき症状という位置付けになっている。確かに、基盤にある全身性疾患を見抜くための重要なサインであることは間違いないが、系統立てて理解することには多くの困難を伴う。

リベドの理解がむずかしい理由の一つに、用語の使い方の不統一がある。Livedo はラテン語の「livere (青っぽい)」に語源があるようだが、とすると、livedo 自体には「網状」という意味は含んでいないことになる。したがって、livedo reticularis として、初めて「網状の青っぽい病変」という意味になる。われわれが、リベド livedo と呼んでいる網状の潮紅には、1) 分枝状皮斑 livedo racemosa, 2) 網状皮斑 livedo reticularis, 3) 大理石様皮膚 cutis marmorata が含まれるが、実はこの中の「網状皮斑」には3つの使い方がある：1) 前記の使い方(狭義)、2) 分枝状皮斑と網状皮斑(狭義)をまとめた使い方(広義)、3) リベドの同義語としての使い方(最広義)。今回、総論の中では、網状皮斑は狭義の意味で使っているが、各論での使い方は一様でないことがわかる。網状の潮紅である livedo 全体を表す日本語として、皮斑やリベドではなく網状皮斑(最広義)をあてる場合があるのも、語源を考えると、もっともな面もある。

ただ、現時点では、多少煩雑ではあるが、網状皮斑という言葉を使うときは、どの意味で使っているのかを明記し、livedo 全体を表すときはリベドという用語を使うのが望ましいと考えられる。

リベドの語源に「青っぽい」という意味合いが含まれているように、リベドの色合いは静脈のうっ血を見ていると考えられる。ただし、その病態において、小動脈の閉塞のみ、あるいは小静脈のうっ滞のみでリベドが生じるわけではなく、動脈側、静脈側の血流異常がどのように絡み合って網状の潮紅を来すのかを解明することは今後の課題である。リベドという平面的視点から捉えられた病変を理解する上で、今までは垂直方向の組織断面像をつなぎ合わせて推測してきたが、画像処理の進歩により、それを三次元的に捉えることは可能になりつつある。

今回は、本誌編集委員会から「リベドをテーマにした編集」という大変な難題をいただいたが、執筆の先生方がご提示くださった貴重な症例のお蔭で、それらを見比べて、診断に辿り着く手掛かりを考えるよい機会となった。リベドの臨床⇒組織⇒他の皮膚症状⇒全身症状⇒検査所見⇒総合判断という過程を通して(総論の表を参照)、皮疹をみて全身を見通す皮膚科医の重要な役割を、改めて考えてみていただければ幸いである。この編集企画が読者の先生方の診療にお役に立つことを心より願っている。